

子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究²

尾 見 康 博¹

発達心理学におけるソーシャル・サポート・ネットワーク研究を簡単にレビューしたうえで、子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークについて質問紙調査を実施した。調査対象者は小学5年生、中学1～3年生、高校2年生であった。調査対象者は、9つのソーシャル・サポート質問項目それぞれに対して、該当するサポート提供者を多肢選択式で選んだ。サポート提供者ごとに該当数を加算し、サポート得点とした。その結果、とくに小学5年生と中学生とのあいだにさまざまな変化が見られることがわかった。中学入学前後で、サポート提供者の中心が、両親から親しい友だちへ移行するのである。性差も見られ、全般的に女子の方がサポート得点が高かった。また、学校の先生や塾・習いごとの先生のサポート得点は、男女ともに非常に低かった。サポート提供者間の関連を検討するため、男女別、学年別にサポート得点を用いて主成分分析を行った。全般的に、家族メンバー、学校の先生、親しい友だちは第一主成分の負荷が大きかった。各サポート提供者間の関連が密接だったのである。そこで、各質問項目について、学校の先生、あるいは塾・習いごとの先生だけを選択した調査対象者がいるかどうかを調べてみた。学校の先生、あるいは塾・習いごとの先生だけを選択した調査対象者が、少数ながらも各学年に存在することがわかり、学校の先生、あるいは塾・習いごとの先生がサポート提供者として独自に機能していることを示した。最後に、ソーシャル・サポートの測定におけるいくつかの問題点について論じた。

キーワード：ソーシャル・サポート・ネットワーク、横断的研究、サポート提供者、子ども。

問 題

心理学におけるソーシャル・サポート研究には、大きく2つの流れがある。1つはストレスや精神的健康との関連でソーシャル・サポートの機能を見ていくという社会心理学的研究の流れであり、もう1つは、母子関係研究から展開した発達心理学的研究の流れである³。もちろん、2つの流れが全く独立になっているわけではないが、独立でないことがかえって混乱を引き起こしているという面もある。

本論は発達心理学の文脈上にソーシャル・サポートを位置づける都合上、主として発達心理学における子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワーク研究を概観することとする。

さて、発達心理学の中でも子どもの対人関係を扱う領域では、従来、Bowlbyの愛着理論をはじめとする母子関係研究が中心で、他の家族メンバーや家族以外との対人関係をあまり扱ってこなかった(小嶋, 1989)。こうした中で、Lewis (1979)は、社会的ネットワークという概念を使って、子どもを取り巻く対人関係を同時に見ていく理論的枠組みを整備した。Lewis (1979)は、子どもたちの社会的ネットワークを調べるために、子どもの生活環境の中にどのような社会的対象(どういふ人)が存在し、どのような社会的機能(「養護」「あそび」などが満足されるか、をマトリックスを使って検討することを提案したのである。

Lewis (1979)の研究対象は主として乳幼児であったが、この流れを汲んでFurman & Buhrmester (1985)は、児童期から青年期の子どもを対象にして、社会的ネットワーク研究を行った。具体的には、NRI (Network of Relationships Inventory) という測定道具を利用して、社会的対象ごとに社会的機能を調べている。ここでは、社会的機能に葛藤(conflict)などの次元を加えてはいるものの、基本的にはWeiss (1974)の社会的提供(social provisions)の理論が援用されている。社会的

¹ 旧東京都立大学人文学部 現山梨大学教育人間科学部

² 本研究は、1992年度東京都立大学子ども調査研究会(代表：(故)加藤義明氏)による共同研究の一部を会のメンバーの承諾を得た上で独自に再解析したものである。

³ この他にコミュニティ心理学による実践的アプローチなどもあるが、このアプローチは広い意味での社会心理学的研究ともいえる。

提供とソーシャル・サポートの概念には実はかなりの類似性が認められ(川原, 1994), Furman & Buhrmester (1992) でも, NRI の社会的提供にあたる次元名に「サポート提供 (provisions of support)」を用いるようになっている。

NRI を用いた研究からは, 小学生から高校生にあたる子どもたちが, どのような対象からどの程度社会的提供を受けるかについていくつかの知見が得られている。以下に具体例を示す。

① 両親から友人への移行 (小～中): 社会的提供の得点は, 小学生の間, 両親からのものがもっとも高く (Furman & Buhrmester, 1985), 中学生になると友人からの得点が高くなり両親を上回る (Buhrmester & Furman, 1986 : Buhrmester & Furman, 1987)。

② きょうだい得点の低下 (小～中): きょうだいからの社会的提供は, 小学 4 年生では友人と同程度だが, 中学以降は友人や両親よりも得点が低くなる (Furman & Buhrmester, 1992)。

③ 先生の低得点 (とくに中～): 先生による社会的提供は, 他の社会的対象に比べて極端に低く (Furman & Buhrmester, 1985), とりわけ中学生以降にはその傾向が強まる (Buhrmester & Furman, 1987 : Furman & Buhrmester, 1992)。

④ 性差 (女子 > 男子): 中学生前後の場合, とくに友人を中心に, 女子の方が男子よりも社会的提供の得点が高い (Furman & Buhrmester, 1985 : Buhrmester & Furman, 1986 : Buhrmester & Furman, 1987 : Furman & Buhrmester, 1992)。

もちろん, NRI 以外の測度を用いて子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークや社会的提供に類するものを調べている研究からも数多くの知見が得られており, おおむね NRI を利用した研究の知見と一貫している。

たとえば, 岡安・嶋田・坂野 (1993) では, 中学生のみを対象にしているものの, 基本的に①～④と同様の結果を得ている。また, 小学校高学年を対象にした森・堀野 (1992) では, ④と同様の結果を得ている。

ただし, これらの研究も含めソーシャル・サポートに関する研究は一般に, ソーシャル・サポートの測定に際し, 多少の問題点があるように思われる。1 つはソーシャル・サポートの下位概念の 1 つとされ, NRI でもよく用いられる社会的友好 (social companionship) に関する問題で, もう 1 つはわが国に限られるものだが, 岡安他 (1993) などで利用されている久田・千田・箕口 (1989) の尺度 (学生用ソーシャル・サポート尺度

<SESS>) に関する問題である。

まず, 社会的友好の問題について述べる。社会的友好とは, 娯楽活動をともにすることなど, 良好な対人関係, 対人交流を意味する (cf. Cohen & Wills, 1985)。つまり, 具体的な支持的行動 (サポート) がなされたかどうかを直接捉えるのではなく, 良好な対人関係だからその中で支持的行動もなされているだろうという推論の下に概念化されているのである。それに対して, 同じくソーシャル・サポートの下位概念である道具的サポートや情緒的サポートは, ある人物の特定の問題に対する具体的な支持的行動であり, その抽象レベルにおいて社会的友好とは性質を異にする。NRI に含まれることの多い親密性 (intimacy) も社会的友好と同様のことがいえる。

また, 社会的友好は, 精神的健康や幸福感といった従属変数を説明しやすくする (Rook, 1987) こともあってか, ソーシャル・サポートの概念とその測定尺度に含まれることが多い。しかし, いうまでもなく, 従属変数を説明しやすいからといって, ソーシャル・サポートの下位概念に含めてよいということにはならない。実際に, Rook (1987) は, ソーシャル・サポートと社会的友好を区分した上で, 両者の機能の違いを実証的に検討している。

つぎに, SESS (久田他, 1989) についてである。SESS は, サポートの期待を量的に測定するものである。たしかに, サポートの期待は, 過去のサポート経験の反映と考えることは可能だろう。SESS の併存的妥当性検討のために, 別角度からのサポート尺度である, 知覚サポート (期待と類似しており, 過去のサポート経験の反映と考えられている) を測定する尺度や, サポート・ネットワーク・サイズ (サポート提供者の数) を測定する尺度との相関を調べ, ある程度の相関係数値 (だいたい.2～.6 程度: 無相関検定ではほとんどが有意) を得ている (箕口・千田・久田, 1989) ことからそのことはいえるかもしれない。しかし, たとえば知り合ったばかりの友人で親しくなれそうな人がいる場合, サポートを受けた経験がなくても, サポートを期待することはできるであろう。また, 母親にずっとサポートを受けてきたが, 今後は期待できないという場合も考えられる。くわえて, 期待感の測定は, 実際に相互交渉あるいはコミュニケーションとしてのソーシャル・サポートがあったかどうかを測定するより, 回答する個人の特性を測定することに近寄ることになる。SESS も, サポート提供者別に期待感を測定することで個人特性に近づけない工夫がなされてはいる。いずれにせよ, 実際の相互交渉

やコミュニケーション、行動などは、質問紙調査による測定という条件の下では、個人の特性が反映する可能性を排除することは不可能ではあるが、あえて個人の特性に近づけた形で、つまり期待感を測定することによって、ソーシャル・サポートを測定する必要はないように思われる。

こうしたことから、本論では、Rook(1987)の指摘のようにサポートと友好は別物として扱うべきであると考え、社会的友好については取り上げない。また、ソーシャル・サポートの期待感も測定しないこととする。そして、本論におけるソーシャル・サポートの定義としては、Shumaker & Brownell (1984) による「送り手あるいは受け手によって、受け手の幸福感 (well-being) を高めようとする意図が知覚される、2人以上の個人間での資源の交換」を採用する。

すなわち本論の目的は、つぎのようになる。社会的友好と切り放したものとして、そしてできるだけ実際の相互交渉を反映するものとしてのソーシャル・サポートを取り上げ、また、さまざまなサポート提供者を用意することにより、わが国の中学生前後の子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークを横断的に検討することである。くわえて、わが国の子どもにとって、塾や習いごとの先生の役割が小さくないと考え、サポート提供者に「塾・習いごとの先生」を含めることにする。さらに、各サポート提供者の得点の高さの基準として、「親しい友だち」とは別に「ふつうの友だち」をサポート提供者に加えることにする。

方 法

1992年10月に、東京都町田市にある公立の小学校、中学校、高校の協力を得て、自記入式の質問紙調査を実施した。

調査対象者と調査用紙の回収方法

小学生：町田市立の小学校1校の5年生117名(男子55名、女子62名)に配布し、教室で記入後、担任を通じて回収した。

中学生：町田市立の中学校2校の1年生383名(男子202名、女子181名)、2年生374名(男子203名、女子171名)、3年生419名(男子210名、女子209名)、計1,176名(男子615名、女子561名)に配布し、家庭で記入後、郵送によって回収した。

高校生：町田市にある都立高校1校の2年生351名に配布し、任意に記入後、教室の回収箱などによって回収した。

有効回収数は、小学5年生111名(94.9%)、中学1年

生224名(58.5%)、中学2年生179名(47.9%)、中学3年生214名(51.1%)、中学計617名(52.5%)、高校2年生114名(32.5%)であった。

質問項目と回答方法

ソーシャル・サポートに関する項目は、久田他(1989)を参考にして、小学5年生から高校生までほぼ共通の質問文を9つ用意した(TABLE 1)。それぞれの項目の下に、「お父さん」「お母さん」「きょうだい」「学校の先生」「塾・習いごとの先生」「親しい友だち」「ふつうの友だち」「その他」「そういう人はいない」のカテゴリを用意し、サポートを受けている相手を選んでもらった(多重回答形式)。

結果および考察

全体的な把握

最適尺度法を用いて解析した⁴。データ・マトリックスの形式は調査対象者[小5～高2まで](行)×[質問項目×サポート提供者](列)である。I軸とII軸の列の負荷量を二次元平面上に布置したところ、該当/非該当(サポートあり/サポートなし)がI軸上で正と負に分かれた(FIGURE 1)。“該当”のみに注目すると、質問項目ごとの一貫したパターンは見られず、サポート提供者ごとにまとまった布置を示した。そこで、以下ではサポート提供者ごとに検討することにする。

TABLE 1 使用したソーシャル・サポート質問項目

- | | |
|-----|---|
| (1) | やったことをほめてくれる人 |
| (2) | あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれる人 |
| (3) | あなたに何かうれしいことが起きたとき、それを自分のことのように喜んでくれる人 |
| (4) | あなたがする話を、たいていおもしろそうに聞いてくれる人 |
| (5) | あなたがグチ(もんく)を言いたいときに、話を聞いてくれる人 |
| (6) | あなたの失敗をカバーしてくれる人 |
| (7) | ひとりではできないことがあったときに、手伝ってくれる人 |
| (8) | 学校での人間関係でなやんでいるときに、相談にのってくれる人
(小学生：学校の友だちや先生とうまくいかなくてなやんでいるときに、相談にのってくれる人) |
| (9) | 家庭での人間関係でなやんでいるときに、相談にのってくれる人
(小学生：家族とうまくいかなくてなやんでいるときに、相談にのってくれる人) |

⁴ この解析を含め本研究のデータ解析はすべて SPSS for Windows ver.6.1.3 を利用した。

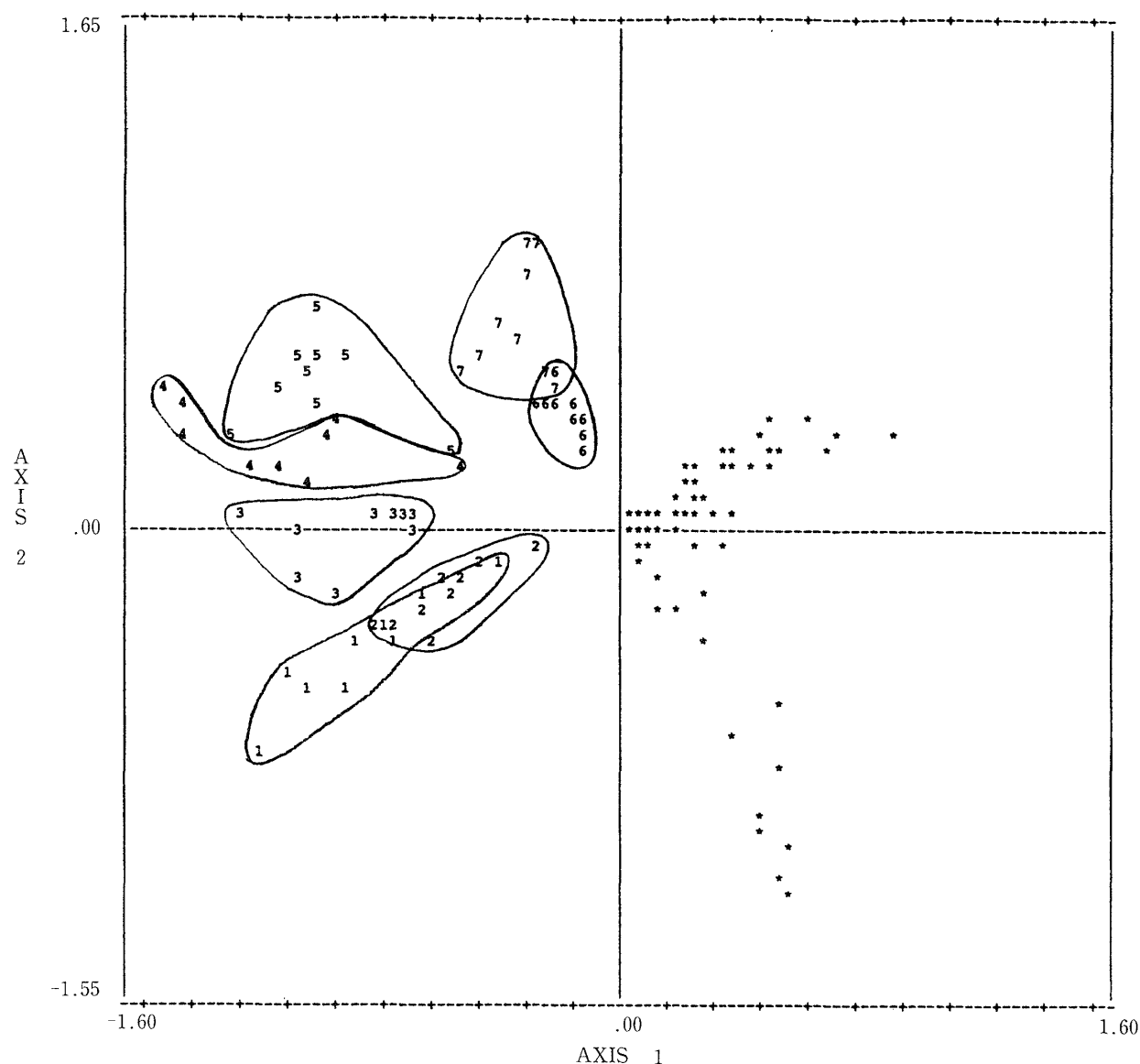


FIGURE 1 最適尺度法による「質問項目×サポート提供者」の布置

- 1 父
- 2 母
- 3 きょうだい
- 4 学校の先生
- 5 塾・習いごとの先生
- 6 親しい友だち
- 7 ふつうの友だち

* 各「質問項目×サポート提供者」に対して非該当

サポート提供者ごとの検討

まず、サポート提供者ごとに、9場面中いくつかの場面でサポートを受けているかをカウントした⁵。サポート提供者ごとの平均得点を性別・学年別に算出した結果をTABLE 2に示す。なお、平均得点の算出の際、「きょうだい」に関しては、きょうだいがいる子ども

の人数を母数とし、「塾・習いごとの先生」に関しては、塾や習いごとに通っている子どもの人数を母数と

⁵ この得点は、さまざまな場面でのサポートの有無を加算したものであるため、得点の高さは、状況に応じた多面的にわたるサポートを受けていることを意味する。つまり、サポートを受けている回数や量の多さを意味するわけではない。

TABLE 2 サポート提供者ごとの被選択数 (平均値)

	男 子					女 子				
	小5	中1	中2	中3	高2	小5	中1	中2	中3	高2
父	3.7	3.4	3.1	2.8	1.5	3.9	3.0	2.5	2.0	1.6
母	4.6	3.9	4.1	3.4	2.7	5.8	4.9	4.0	4.0	3.6
きょうだい	3.2	1.9	2.3	1.6	1.5	3.3	2.9	2.1	2.3	2.5
学校先生	1.0	1.8	1.2	1.4	0.1	0.7	1.7	1.0	1.1	0.3
塾先生	0.8	0.9	0.8	1.2	0.1	1.4	1.0	1.0	1.1	0.5
親友	2.8	5.4	5.8	5.5	5.0	6.2	7.8	7.2	7.7	7.6
友だち	1.8	2.5	2.1	2.0	1.9	3.2	2.5	2.1	2.6	2.4
その他	0.7	0.6	0.6	0.6	1.2	0.9	1.0	0.9	1.1	0.4
いない	2.3	1.5	1.5	2.1	2.5	0.8	0.4	0.6	0.5	0.8

した。

これらのサポート得点を従属変数として、学年と性を独立変数とする2元配置の分散分析を行った。その結果を以下に示す。有意水準は5%, 1%, 0.1%の3つを用意した。

① 父親 (FIGURE 2) 学年が上がるにつれてサポート得点が低くなった ($F=10.22, df=4, p<.001$) が、性差は見られなかった ($F=1.75, df=1, n.s.$)。

② 母親 (FIGURE 3) 学年が上がるにつれてサポート得点が低くなった ($F=6.73, df=4, p<.001$)。また、女子の方がサポート得点が高かった ($F=9.40, df=1, p<.01$)。

③ きょうだい (FIGURE 4) 他の学年に比べ、小5のサポート得点が高かった ($F=3.28, df=4, p<.05$)。また、女子の方がサポート得点が高かった ($F=5.24, df=1, p<.05$)。

④ 学校の先生 (FIGURE 5) 中学生に比べ、小5と高2のサポート得点が低かった ($F=11.71, df=4, p<.001$) が、性差は見られなかった ($F=.78, df=1, n.s.$)。

⑤ 塾・習いごとの先生 (FIGURE 6) 学年差、性差のいずれも見られなかった ($F=1.90, df=4, n.s.$; $F=1.50, df=1, n.s.$)。

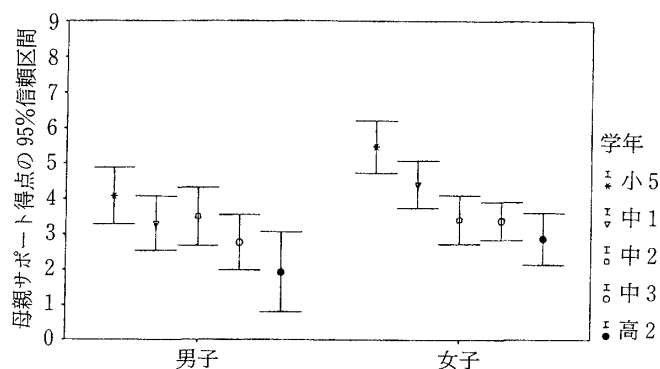


FIGURE 3 母親サポート

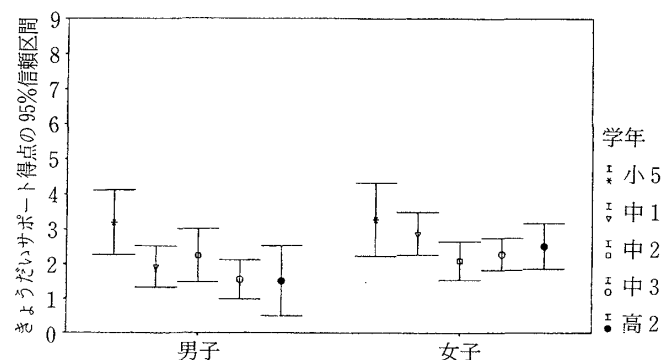


FIGURE 4 きょうだいサポート

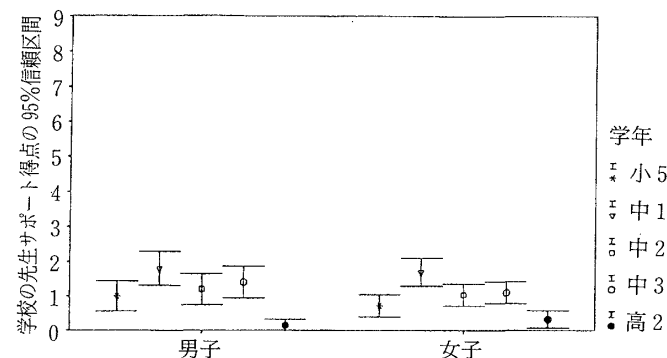


FIGURE 5 学校の先生サポート

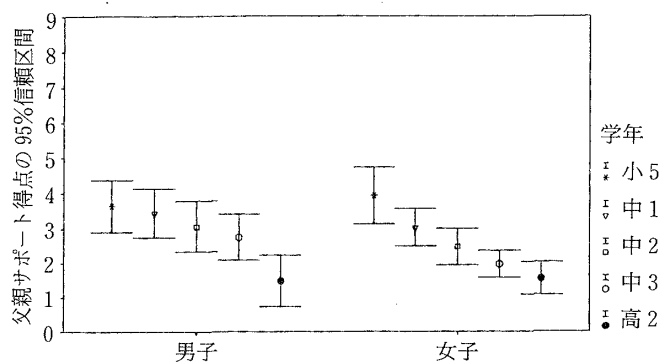


FIGURE 2 父親サポート

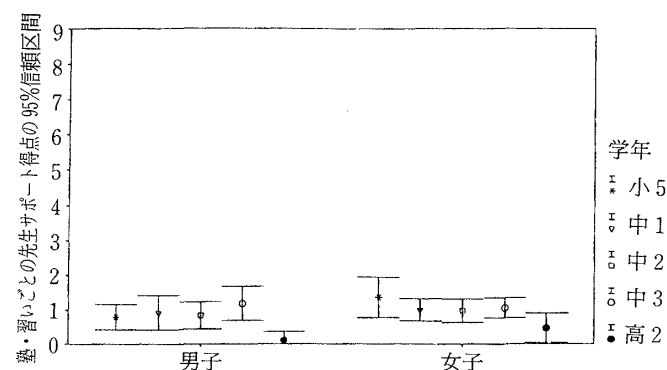


FIGURE 6 塾・習いごとサポート

⑥ 親しい友だち (FIGURE 7) 他の学年に比べ、小5の得点が低かった ($F=10.82, df=4, p<.001$)。また、女子の方がサポート得点が高かった ($F=125.02, df=1, p<.001$)。

⑦ ふつうの友だち (FIGURE 8) 女子の方がサポート得点が高かった ($F=5.91, df=1, p<.05$) が、学年差は見られなかった。

交互作用はいずれにおいても見られなかった。

さて、以下では、これらの結果を「家族」「親しい友だち」「先生」の3つにまとめて検討することとする。

家族メンバーは概ね、高学年になるとサポート得点が増加する傾向が見られた。男女とも父親よりも母親の得点が高いが、女子の方が両者の得点差が大きい。きょうだいの得点は全般的に母親や父親よりも低い。また、きょうだいの得点は中学生以降に低くなっている。

「ふつうの友だち」と比較すると、母親は男女ともどの学年においても高得点であるが、父親ときょうだいはそうっていない。父親については、男子の場合高2で、女子の場合中3以降で「ふつうの友だち」以下となる。きょうだいについては、あまり系統的な結果とはなっていないが、小5の男子が「ふつうの友だち」よりも高得点であることをのぞけば、ほぼ同程度の得

点となった。このように、両親を中心として、家族メンバーからサポートを受ける場面は中学生以降軒並み減少するのである。この結果は、Buhrmester & Furman (1986, 1987) などのNRIを用いた横断的研究と同様である。

親しい友だちに関しては、中学生以降に得点が高まる傾向が見られ、友人関係の大きな変化が中学入学前後にあることがわかる。男子では中1の時点で親しい友だちが両親を上回って最高得点となりその後もトップの座を占める。女子にいたっては小5から高2まで全学年で、親しい友だちが最高得点となっている。中学入学前後で、サポート提供者が家族から親しい友だちに移行するという結果もやはり、Buhrmester & Furman (1986, 1987) などと同様の結果であるとともに、この時期における友人関係の重要性を改めて感じさせられる。

学校の先生や塾・習いごとの先生は、全般的に低得点であり、とりわけ高2でその傾向は著しかった。学校の先生の低得点については、Furman & Buhrmester (1992) などと同様の結果である。また、学校の先生、塾・習いごとの先生ともに、また男女ともに、「ふつうの友だち」と比べて高得点の学年はなかった。なお、他学年に比べて小5で「学校の先生」が低得点であったことについては、先行研究に見られない結果であった。Buhrmester & Furman (1987) や Furman & Buhrmester (1992) はもとより、わが国で小学校高学年を対象にした調査結果 (森・堀野, 1992) でも、小学生時の先生からのサポート得点は中学生以降に比べそれほど低くはなかった。今回の調査結果からこの問題について解釈することは困難であり、今後の検討課題として残る。

学校の先生と塾・習いごとの先生を比べてみると、全般的に大きな違いは見られなかったが、中1で学校の先生の方が高得点であり、小5女子で塾・習いごとの先生の方が高得点であったのが若干目立った。

また、性差に関して、その全般的傾向を見ると、母親、きょうだい、親しい友だち、ふつうの友だちで、女子の方が一貫して得点が高かった。全般に女子の方が、さまざまな対象からさまざまな場面でサポートを受けていることがわかる。Buhrmester & Furman (1987), Furman & Buhrmester (1992), 森・堀野 (1992), 岡安他 (1993) とほぼ同様の結果と言える。

サポート提供者間の関連の検討

サポート提供者間の関連を検討するために、男女それぞれ学年別に、サポート対象者のサポート得点を変

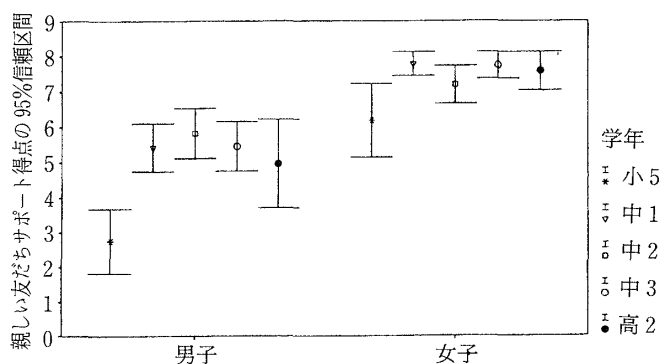


FIGURE 7 親しい友だちサポート

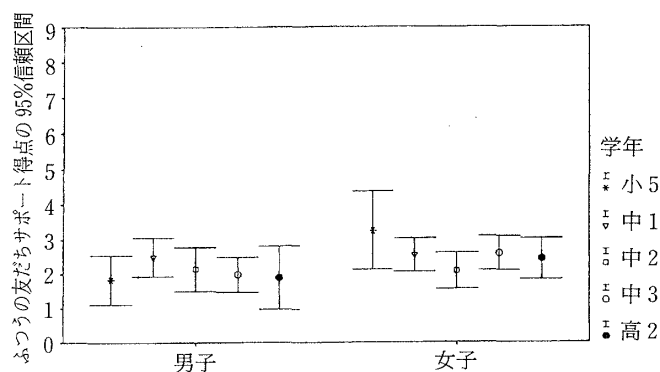


FIGURE 8 ふつうの友だちサポート

数として主成分分析を行った。第一主成分の負荷量ならびに固有値、説明率を TABLE 3 に示す。

男女ともに、どの学年においても、父、母、きょうだいの負荷量が大きくなっている。高2女子の「きょうだい」.43をのぞけば、これらの負荷量は、.61～.85のあいだに位置している。このことから、男女ともどの学年も家族からのサポートが第一主成分の中心であることがわかる。

「親しい友だち」は、男女で違いが見られた。男子は、どの学年においても .54～.66 と負荷量が大きかったが、女子は、小5、中1、中2 で負荷が極めて小さかったのである (-.01～.25)。つまり、小5～中2の女子に限って、サポート享受場面の数が、「親しい友だち」と家族や先生などとの間に関連がないのである。このことから、小5～中2の女子では、サポート提供者としての「親しい友だち」に対して独自の位置づけがなされていることがわかる。別の見方をすれば、この時期の女子では、家族や先生の得点と親しい友だちの得点が同様のパターンを示す子どももいれば、逆のパターンを示す子どももあり、「親しい友だち」が個人によって多様に位置づけられていると言える。そして中3と高2では、「親しい友だち」が「ふつうの友だち」と入れ替わる形で他のサポート提供者との関連を強めている。なお、男子では「ふつうの友だち」の負荷量の変動が不規則であり、解釈するのが困難な結果であった。

また、「学校の先生」は、これらの第一主成分に対して .44～.79 といずれも大きく負荷している。「塾・習いごとの先生」(-.13～.63) よりも概ね大きい負荷量である。「学校の先生」はサポート享受場面の数において、家族とあまり独立しておらず、密接に関連しているのである。「学校の先生」からさまざまなサポートを受ける子どもは、家族からも受けており、逆に、「学校の先

生」からサポートを受けない子どもは、家族からも受けていないということになる。先に見たように、「学校の先生」は全般的に低得点でもある。やはり、サポートにおける「学校の先生」の独自の機能はないのだろうか。

これまで見てきた縮約値を見るかぎり、独自性はほとんどないといわざるを得ない。しかし、あえて独自性を探索するため、(1)～(9)の質問項目ごとに、「学校の先生」だけにサポートを受けているとしている調査対象者がいるかどうか調べてみた。すると、(1)4名、(2)1名、(6)4名、(7)1名、(8)2名、(9)5名の計17名が、「学校の先生」だけに各サポートを受けているとしていた。17名はそれぞれ別の被調査者であった。また、17名の内訳を見ると、小学生こそいなかったものの、中学生と高2の各学年の男女が含まれていた。つまり、学校の先生の独自性がゼロというわけではないのである。同じように、質問項目ごとに「父親」だけに各サポートを受けているとしていたのが、19名（のべ29名）であったことと比較しても、平均得点の低さだけで判断すべきでないことがわかる。この結果から、学校の先生は、必ずしもサポート提供者として子どもたちと接することが不可能というわけではなく、良好な関係をつくり適切な場面さえ設定されれば、他の誰からも得られないサポート提供者として、子どもたちにとってかけがえのない人物になりうるということが明らかとなったのである。塾・習いごとの先生についても同様のことがいえる。学校の先生に比べてわずかではあるものの、中学生を中心に(1)4名、(2)3名、(4)(6)各1名が塾・習いごとの先生のみをサポート提供者として挙げていたのである。

以上のように、今回の調査によってさまざまな知見が得られたわけだが、問題点がなかったわけではない。一例を挙げると、今回の調査に限らず、ソーシャル・サポート研究がデータとして得ている「サポートの存在」が、良好な対人関係、あるいは受け手にプラスの結果をもたらすもの、と等価になってしまっていることである。つまり、サポートの有無を超えて、サポートによる（プラスの）効果までが、暗黙のうちに質問項目に含められてしまうということである。たとえば、本研究で用いた質問項目の「(2)落ち込んでいると元気づけてくれる人」に対して、「父」が該当すると回答する人は、「父が元気づけてくれたおかげで元気になった」ことまで読みとって回答している可能性が高い。少なくとも「元気づけてくれたが、やり方がひどくてかえって迷惑だった」というエピソード（尾見, 1993 参照）

TABLE 3 性別・学年別第一主成分の負荷量

	男 子					女 子				
	小5	中1	中2	中3	高2	小5	中1	中2	中3	高2
父	.70	.81	.75	.83	.72	.77	.79	.85	.71	.69
母	.74	.83	.73	.85	.72	.72	.81	.76	.69	.80
きょうだい	.71	.69	.64	.63	.72	.65	.70	.74	.61	.43
学校先生	.67	.79	.75	.71	.64	.57	.74	.60	.44	.58
塾先生	.33	.52	.59	.53	-.13	.24	.53	.46	.44	.63
親友	.62	.54	.56	.66	.58	-.01	.25	.20	.51	.48
友だち	.51	.15	.47	.27	.11	.36	.36	.45	.44	.02
固有値	2.74	3.03	2.96	3.09	2.34	2.05	2.79	2.66	2.19	2.25
説明率(%)	39.1	43.3	42.3	44.1	33.5	29.3	39.9	38.0	31.3	32.2

を想起することは極めて稀であろう。本来であればこのような現象まで拾わなければ、ソーシャル・サポート研究としては公平とはいえない。その意味で、本研究で捉えたものを厳密にいうと、ソーシャル・サポート・ネットワークではなく、良好な対人関係のネットワークとなるのかもしれない。

この問題点は、あるいは質問紙による構造化された(尺度を用いた)調査の限界をも示すといえよう。面接法など質問紙法以外の方法をとる必要があるかもしれない。いずれにせよ、今後この問題点を解消できる研究方法の開発が望まれる。

引用文献

- Buhrmester, D., & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood : A neo-Sullivanian perspective. In V. J. Derlega & B. A. Winstead(Eds.), *Friendship and social interaction*. New York : Springer-Verlag. Pp. 41—62.
- Buhrmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, **58**, 1101—1113.
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310—357.
- Furman, W., & Buhrmester, D. 1985 Children's perceptions of the personal relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, **21**, 1016—1024.
- Furman, W., & Buhrmester, D. 1992 Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, **63**, 103—115.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143—144.
- 川原誠司 1994 子どもを対象としたソーシャル・サポート研究の動向 東京大学教育学部紀要, **34**, 245—253.
- 小嶋秀夫 1989 乳幼児の社会的世界と発達 小嶋秀夫(編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣, Pp.1—18.
- Lewis, M. 1979 *The social network : Toward a theory of social development*. Fiftieth Anniversary invited address, Eastern Psychological Association meetings, Philadelphia. (山田洋子(訳) 1983 社会的ネットワーク[上・中・下] サイコロジー, **34**(Pp.69—73), **35**(Pp.68—72), **36**(Pp. 61—67) サイエンス社)
- 箕口雅博・千田茂博・久田 満 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 145—146.
- 森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャル・サポートに関する一研究 教育心理学研究, **40**, 402—410.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302—312.
- 尾見康博 1993 日常対人場面のサポートに関する記述的研究 異常行動(PBD)研究会誌, **32**, 25—36.
- Rook, K. S. 1987 Social support versus companionship : Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1132—1147.
- Shumaker, S. A., & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support : Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, **40**, 11—36.
- Weiss, R. S. 1974 The provisions of social relationships. In Z. Rubin (Ed.), *Doing unto others*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.

(1997.12.19 受稿, '98.7.3 受理)

A Cross-Sectional Study of the Social Support Networks of Children and Adolescents

YASUHIRO OMI (FACULTY OF EDUCATION AND HUMAN SCIENCES, YAMANASHI UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1999, 47, 40—48

Social support networks of Japanese children and adolescents were explored. Grade 5 elementary school children, 1st to 3rd year junior high school students, and 2nd year high school students completed a social support network questionnaire. The questionnaire consisted of 9 multiple-choice items regarding support providers, namely, father, mother, intimate friend, school teacher, etc. Composite scores (support scores) for each support provider were calculated by sex and grade. Some differences between grade 5 elementary school children and junior high school students in support scores were found. Generally, support scores of female students were higher than those of male students. Support scores for public school teachers and private school teachers were generally low. The principal component analyses for support scores were performed by sex and grade to examine the relationships of support providers. Generally, family members, school teacher, and intimate friend were highly loaded in the first principal components. It was found that a small number of students who chose only public school teacher or private school teacher in each item also existed. Finally, issues relating to measurement of social support were discussed.

Key words : social support networks, cross-sectional study, support provider, children, adolescents.